

因中有果説の陷穽

——五元素における性質の通増問題——

近 藤 隼 人

1. 緒言

Sāṃkhyakārikā (SK) に描かれる古典サーンキヤ体系においては、音声 (śabda)・感触 (sparśa)・色 (rūpa)・味 (rasa)・匂い (gandha) という五種のタンマートラ (tanmātra) から虚空 (ākāśa)・風 (vāyu)・火 (tejas)・水 (ap)・地 (pṛthivī) という五種の元素 (bhūta) が一対一対応で展開することが窺い知れる (SK 22, 38)。そして、SK そのものには言及されないが、大半の SK 注釈書には風以下の各元素における性質の通増が認められている。すなわち、風元素には音声と感触、火元素には音声と感触と色、水元素には音声と感触と色と味、地元素には音声と感触と色と味と匂いという性質が存するとされ、性質が通増的に増加すると想定されている (以下「通増説」)。しかしながら、この通増説に関しては因中有果説との整合性が確保されねばならない。因中有果説とは、結果が発生以前よりその原因内に可能態として潜在しているとする、古典サーンキヤを特色づける教説であるが、五タンマートラから五元素が一対一対応の関係で生成され则认为なら、先行する性質がいかにして継承されるのかは定かではなく、因中有果説と齟齬を来す虞すら生じる。本稿では SK 注釈書における通増説の記述から因中有果説との齟齬を確認し、さらに SK 以前に遡る *Mahābhārata* (MBh) における通増説的記述から同説の淵源を探索しつつ、因中有果説との関係性について考察する。

2. *Sāṃkhyakārikā* 注釈書における通増説

最初に考察すべきは、通増説を示す SK 注釈書である。注釈書九本のうち、『金七十論』, *Sāṃkhyavṛtti*, *Gauḍapādabhāṣya* には通増説が示されないのに対し、*Sāṃkhyasaptatvṛtti* (V_1), *Yuktidīpikā* (YD), *Tattvakaumudī* (TK), *Jayamaṅgalā* (J), *Māṭharavṛtti* (M), *Sāṃkhyacandrikā* (C) には言及がみられる。ただし、これら六本の中でも V_1 にはタンマートラと元素との一対一対応関係に言及されているが、いかに

して元素における性質が通増するのか、そのメカニズムは明らかにされていない。それに対し *YD* 等はこの説明不足を補うかのように、性質通増の根拠づけを図っている。*J* においてはタンマートラが先行するタンマートラと「結びつく」(pratisamhita)、また *TK* および *C* においては先行するタンマートラを「伴う」(sahita) ことで当該元素が先行する性質を継承するとされている¹⁾。例えば地元素の発生に際しては、匂いタンマートラが先行する四タンマートラ（音声・感触・色・味）と結びつく、ないしそれらを伴うことで地元素が五種の性質を有するという。しかしながら、その場合はタンマートラと元素とが一对一对応関係にあると主張しようとも、当該元素の発生に際して先行するタンマートラが関与するとなれば、もはや一对一对応関係は意味をなさず、因中有果説自体も骨抜き同然の状態に陥ることになる。

また、*M* においては「先行する〔タンマートラ〕が各々〔後続するタンマートラへと〕入り込む」(pūrvapūrvānupraveśa) として、風元素以下の発生に際して先行するタンマートラが入り込むとされている²⁾。この場合も上掲 *J* と大同小異であり、一对一对応関係を是認するなかで、元素というタットヴァの発生に際して複数のタットヴァが関与するとなれば、依然として因中有果説との理論的整合性を見出すのは困難である。例えば感触タンマートラからの風元素発生を考える場合、因中有果説は感触タンマートラに風元素の潜在を要請するが、虚空元素と一对一对応関係にある音声タンマートラがそれに関与する余地は全くないはずである。仮に音声タンマートラも風元素発生の一因を担うと考えるのであれば、もはや感触タンマートラからの風元素発生を認める必然性がなくなり、ひいては音声タンマートラと感触タンマートラとの差異すら見出されなくなる虞があるからである。そうかといって因中有果説との整合性を保つためには、感触タンマートラ以下が先行するタンマートラの性質も併せ持つ必要があるが、それは後掲 *YD* の見解に相当する。*YD* も *J* 等と同じく一对一对応関係を示しつつ、元素における性質の通増を説いているが、*YD* においてはタンマートラ間の混淆が明確に否定されており、以上の記述とは一線を画している。

それら〔五元素〕のうち、虚空〔元素〕は音声タンマートラから〔生じる〕。(中略) 地〔元素〕は匂いタンマートラから〔生じる〕。「それらからは元素が」(tebhyo bhūtāni) とだけ述べられればよいにもかかわらず、「五〔タンマートラ〕から五〔元素〕が」(pañca pañcabhyah) という表現が〔SK 38で〕用いられているのは、数が等しいことによってそれら（五元素）が生じることを知らしめるためである。そのことにより、一タンマートラから一特殊態が生じるということが成立した。したがって、一つの特質を有するタンマートラから〔それが〕相互に入り込むこと (parasparānupraveśa) で、特殊態は一ずつ〔特質が〕

増加して生み出されると他の諸学匠によって意図されているが、そのことが否定されたことになる。そうではなく、タンマートラが〔相互に〕入り込むことなくとも、一ずつ増加した要素（タンマートラ, *bhūta*）³⁾ から一ずつ増加した元素の特殊態（*bhūta viśeṣa*, 特殊な元素）が生じるのである。その場合、（中略）音声・感触・色・味・匂いという性質を有する匂いタンマートラから五性質を有する地〔元素〕が〔生じる〕。（中略）一方、匂いは地〔元素〕のみにある。それ（地元素）の一部が入り込むことで〔匂いは〕〔地元素以外の〕他の元素（虚空・風・火・水）にも認められる。以上これらが地〔元素〕などの諸属性である。〔重さなどの〕他〔の諸属性〕は相互に裨益しあう〔ことにより生じる〕もの（*parasparānugrahaka*）である⁴⁾。

ここで否定されている「他の諸学匠」（*anyeṣāṃ ācāryāṇāṃ*）の見解によると、タンマートラ自体の性質通増ではなく、一性質のみに限定されたタンマートラが混淆することで元素の性質が通増するという。この見解は上掲 *J* などに酷似しており、表現上 *M* とも類似しているが、*YD* の「相互に入り込むこと」が指す状況は不明である。「相互に」とはいえ、実際には先行するタンマートラと協働して元素を発生させるのであってその逆の関係にはない以上、*YD* の批判の矛先は *J* などの見解の下地となった一性質のみのタンマートラに向けられていたと考えられる。かくして *YD* はタンマートラ自体に性質の通増を想定することで、因中有果説との抵触を回避しつつ元素における性質の通増を説明づけるに至ったのである。

しかしながら、この *YD* の解釈によると、例えば匂いタンマートラには匂いのみならず音声と感触と色と味も併せ持つことになるが、この解釈は通増説との整合性を保つためだけに捻出された牽強附会の理論という印象すら与える。実際、この解釈は *YD* のタンマートラ解釈とも齟齬を来しかねず、*YD* はタンマートラの「マートラ」の意味に重きを置いて “*jāti*” や “*sāmānya*” と解している。例えば感触タンマートラには硬軟などが存在せず、色タンマートラには白黒などが存在しないというように、タンマートラは一種の普遍を指す純粋要素として理解されている⁵⁾。それにもかかわらず、当該タンマートラに先行するタンマートラの要素が含まれると解する場合、*YD* の解釈は整合的に解しがたい。

ここで附言すべきは、タンマートラにおける性質の通増を認める解釈が *YD* のみに帰されるわけではなく、「タンマートラには単一の性質（*rūpa*）しかない」と他〔の諸学匠〕はいうが、ヴァールシャガニヤはそれが一ずつ増加する（*ekottara*）という」（*YD* 187.10-11）と明言されるように、先師ヴァールシャガニヤに帰される解釈だという点である。この記述から推すに、タンマートラに性質の通増を認める見解はヴァールシャガニヤ特有のものであったと考えられる。この解釈が編み出

された経緯こそ定かでないものの、上掲 *YD* の議論を考慮すれば、元素における性質の通増を説明づけるため、換言すれば因中有果説との齟齬を回避するために考え出されたという仮説が導出されよう。しかしながら、本仮説を裏付けるヴァールシャガニヤの断片は残されていないため、初期サーンキヤ思想を含むとされる *MBh* にみられる通増説を考察する。

3. 通増説の淵源

MBh の中でもとりわけ第12巻 (*Śantiparvan*) *Mokṣadharmā* 部は、体系化以前の揺籃期サーンキヤ思想のみならず、相反するような当時の様々な哲学的思想を内包している。元素の性質に関する議論もその例に漏れず、一元素一性質説が表明される箇所も少なくないが⁶⁾、一方で通増説に言及する箇所も散見される。中でも着目すべきは、明確に通増説を示す *MBh* 12.224.35–39 である⁷⁾。

マナスは「ブラフマンの」創造意欲に駆り立てられて創出物へと変容する。それ（マナス）からは虚空が生ずる。それ（虚空）の性質は音声であるとみなされている。変容する虚空からは、あらゆる匂いを運ぶ、清浄なる力強い風が生ずる。それ（風）の性質は感触であるといみなされている。また、変容する風からは、闇を打ち払い輝く火 (*jyotis*) 元素がそこに生ずる。それ（火元素）は色という性質を有するといわれている。また、変容する火からは、味を本体とする水が生ずる。[変容する] 水からは匂いという性質を有する地が[生ずる]。これが最初の創出であるといわれている。各々先行する[元素]の性質は順次後行する[元素]に獲得される。それら（元素）にはその位置に応じただけの性質があると伝承されている。

ここでは〈虚空→風→火→水→地〉という次第で一元素一性質としての生起を基本形としつつ、最終詩節において通増説が表明されている。ここで着目すべきは元素が元素を生む図式であるが、古典サーンキヤ体系とは異なるこの図式下でこそ、一元素一性質を保ったまま先行元素の性質継承が可能となる。その場合、通増説は本来、元素が元素を生む図式のもとで創出された見解であり、古典サーンキヤ体系には適合しないと推察されるが、この点は *MBh* 12.224 がサーンキヤ説の影響を受けていないとする Frauwallner (1925) 説の一傍証となりうる。

実際にこの図式と古典サーンキヤ体系との差異を意識していた学匠も見受けられるが⁸⁾、シャンカラによるウパニシャッド注間の記述の相違は本推察を確証するうえで有効である。元素が元素を生成する展開図式は、Frauwallner (1925, 63) も指摘するように *Taittirīyopaniṣad* (*TaiU*) 2.1 に見受けられる。同箇所にはアートマンから虚空が生じ、その後は上掲 *MBh* と同じ展開系列が示されるが、シャン

カラはこの注釈として明確に通増説を表明している⁹⁾。その一方で、単にプラナナからの元素等生成を説く *Praśnopaniṣad* (PU) 6.4 に対しては、固有の性質とその原因たる性質が入り込むことで先行する性質も併せ持つと注する¹⁰⁾。

虚空は音声を性質としている。風は固有の〔性質である〕感触および原因たる性質（音声）によって特徴づけられ、二性質を有する。同様に、火は固有の〔性質である〕色、および音声と感触という先行する二〔性質〕によって特徴づけられ、三性質を有する。同様に、水は固有の性質である味、および先行する〔三〕性質（音声・感触・色）が入り込むことで四性質を有する。同様に、地は〔固有の〕性質である匂い、および先行する〔四〕性質（音声・感触・色・味）が入り込むことで五性質を有する。

ここでは「先行」という概念が持ち出されているが、PU 6.4 には *TaiU* 2.1 とは異なり元素の生成次第が明示されていない。シャンカラのこの解釈は上掲 *M* と同様に、通増説を主張するための苦肉の策であると評せられよう。

4. 結語

古典サーンキヤ体系においては、因中有果説のもとで五元素の性質通増を説明づけることには理論上困難を伴う。その難点は、タンマートラ自体に性質の通増を想定する一方で、タンマートラを純粹要素とみなす *YD* に顕著に認められた。通増説の淵源を *Mokṣadharmā* に求めるならば、その一節からは元素から元素が生成する図式下でこそ通増説が有効に機能しうることが確認された。この点は、元素の展開次第の相違に応じて記述を異にするシャンカラのウパニシャッド注からも読み取ることが可能である。

以上の考察からは、通増説は元素が元素を生む図式と親和性が高いことが理解できる。諸文献における様々なサーンキヤ的展開系列の分布を考慮するに、元素が元素を生む図式が初期サーンキヤ思想の主流を占めていたとは考えがたい。その場合、通増説を表明しない *SK* 注釈書の存在を加味すれば、サーンキヤ体系内に通増説が導入された時期は比較的後代のことであると推測され、この点は *MBh* 12.224 を非サーンキヤ的とみる推察からも首肯されうる。また、通増説と因中有果説とが排反的に理解されうるなら、因中有果説のもとで元来は一元素一性質で理解されていたが、後代の通増説導入を受けて *SK* 諸注釈書が通増説の説明、ひいては因中有果説との整合性確保に苦慮することとなったという思想史が想定されうる。あるいは逆に、因中有果説と通増説との共存を考慮すれば¹¹⁾、通増説的発想は有しつつも、後代になり因中有果概念が変容、精緻化されるに至ったという思想史も想定される。いずれにせよ、思想史構築に際しては、元素

からタンマートラないしタンマートラ相当の展開物（性質、対象）が生成されるという一部の初期サーンキヤ思想の展開次第も考慮されねばならない¹²⁾。さらに、遍増説に関してはサーンキヤとは発想を異にするヴァイシェシカ説との関係性も考察を要するが、諸説紛紛の様相を呈する因中有果説の導入時期をめぐっては、遍増説が一つの有力な鍵概念たりうる可能性が新たに明らかとなった。

- 1) 村上1978, 586-87参照。 2) 村上1978, 587-88参照。 3) *Yuktidīpikā*, ed. Albrecht Wezler and Shujun Motegi, vol. 1 (Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998), 188.10-11参照。 4) *YD* 225.8-23。 5) *YD* 224.25-225.2参照。 6) *The Mahābhārata*, vols. 15-16, part 3, ed. Shripad Krishna Belvalkar (Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1954) 12.187.8-10, 203.32, 239.9-12, 244.3-9, 332.6-10。 7) 上記引用箇所以外では *MBh* 12.177.29, 31, 33, 35が挙げられる。 8) ヴェーダーンタ・デーシカ著 *Nyāyasiddhāṇjana* がその代表例であり、同箇所では *TaiU* 2.1を根拠にサーンキヤ説が否定されているが、そのサーンキヤ説によるとタンマートラと元素は一対一対応関係にあるが、感触タンマートラ以下四種は先行するタンマートラと協働しつつ風以下の四元素を生成するという (*Nyāya siddhāṇjana* [sic] by *Srimad Vedānta Desika with Two Old Commentaries*, ed. Kṛṣṇatātayārya ([s.l.] : [s.n.], 1976), 89.1-90.1)。また、クッルーカも *Mānavadharmaśāstra* 1.15に対する注釈においてサーンキヤ説と *TaiU* 2.1との会通を図っている (*The Manusmṛti with the Commentary Manvarthamuktāvali of Kullūka*, ed. Nārāyaṇ Rām Āchārya, 10th ed. (Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1946), 8.23-9.13)。 9) *Taittirīyopaniṣatsaṭikaśāṅkarabhāṣyopetā*, ed. Vāmanaśāstrī Isalāmapurakara and Ānandāśramasthapāṇḍitas (Punyākhyapattana: Ānandāśramamudraṇālaya, 1889), 48.1-3 (*TaiU* 2.1), 9-15参照。 10) *Praśnopaniṣat*, ed. Ānandāśramasthapāṇḍitas (Punyākhyapattana: Ānandāśramamudraṇālaya, 1911), 71.1-3 (*PU* 6.4), 8-11参照。 11) *Carakasamhitā* 4.163-64や『大智度論』(T no. 1509, 25:546c18-29) 参照。後者については今西1968, 70-74参照。 12) *Buddhacarita* 12.17-20および *Anugītā* 40-42参照。また、元素を「原質」(prakṛti)とし、対象 (viṣaya) を「変容物」(vikāra)とするものとしては *MBh* 12.294.27-29 (*MBh* 12.203.25-29も参照), *Carakasamhitā* 4.163-64など参照。サーンキヤ展開系列の諸説については本多1980, 291-307参照。

〈参考文献〉

- Frauwallner, Erich. 1925. "Untersuchungen zum Mokṣadharmā: Die nichtsamkhyistischen Texte." *Journal of the American Oriental Society* 45: 51-67.
 今西順吉 1968 「竜樹によつて言及されたサーンキヤ思想——初期中観派におけるサーンキヤ思想（一）——」『北海道大学文学部紀要』16 (2): 35-96.
 本多恵 1980 『サーンキヤ哲学研究』上, 春秋社。
 村上真完 1978 『サーンキヤ哲学研究——インド哲学における自我観——』春秋社。

〈キーワード〉 Sāṃkhya, *Yuktidīpikā*, Mokṣadharmā, Śāṅkara, accumulation theory

（東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門特任研究員，
 博士（文学））